慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本精神生成史論 上代編(鈴木重雄, 理想社出版部)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.166(344)- 167(345)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

譯書の序文にメイエ氏自ら筆をとり印歐語比較の方法は極東語の研究にその儘眞似すべきでないと斷つてをられる如く吾人は西人の研究にたゞ追隨することは出來ぬが極東語比較研究の分野が邦人の手により開拓され、新たなる研究方法の提供せられんことは今日の緊急事であらう。

本書の原著は人に貸して今手許にないので譯書との校合をなすことが出來ぬが著者の學問的良心は既にタキトゥスの邦譯に於ても明かにされ、本譯書も充分信賴をもつて讀むことが出來る。ベダンチクな學者に多い難解な譯語を使用することなくよく原語を挿入して理解に便ならしめ極めて明快に譯出してあるのは譯者の手腕の凡ならざることを示すものと云へやう。殊に廿四頁にわたる精密な補註を加へ、著者の論文著作目錄を添附し、「世界の言語」に掲載したメイエ氏の總序の譯を附加したりなど、譯書として近來稀に見る精密さを示し、なまじつかの著書より遙かに優つてをる。吾人は本書を凡そ言語に關心する士の是非机上に備へ玩味すべき書物として推薦する。因みに著者は新村博士門下の逸足、現に京都大學言語學の講師である（松本信廣）。

國語索引（鈴木隆一編　東方文化學院京都研究所刊）

近時漢籍索引の作成事業が各所に企てられつゝあることは斯界の爲欣ぶべき現象である。京都研究所の創設せられるや廿四史索引製作の企圖せられしことは坊間に傳えられたがその未だ發刊せられざる中に今度小島敎授の指導の本に鈴木氏の作成せられし國語索引が先づ世に著はれ、多年の渇望を醫して呉れた。人名地名は云ふに及ばず各種事項を畫引によつて排列し一々その出所を列擧し綿密を極めてをる。此種の著作は製作者の適否によつて左右せられる所多く、或場合には全く使用に不便を感ずる場合が多い。此點に於て本書はさすがに指導及び製作その人を得たりと云ふべく周到なる注意の本に纂輯せられ、頗る使用便利なかつ利益する所多き出版である。本書の如き萬代を益する良書を提供された著者の勞苦に期して深く感謝する（松本信廣）。

日本精神生成史論　上代編（鈴木重雄　理想社出版部）

本書は日本の國の生立ち——著者鈴木重雄氏の眼に映つた日本の生立ち——の姿を寫したものである。氏は古事記日本書紀に對する用心と共に本書を讀む人は氏自身に對しても用心することが必要であるとされ、

私がこれから述べるところは、私に見えた日本の原形眞相であることは言ふまでもない。私に見えたものである以上、私の個性に依つて歪められて居るかも知れない。歪めるつもりは毛頭ないが、無意識の內にかかる結果を招いて居るかも知れない。

といはれるが、結局氏が自我意識から出發する以上氏の個性が表現されるのは當然であり、我々は氏の個性が表現されてゐる文化的生産として之を觀れば足りるのである。

元明の和銅五年（一三七二）元正の養老四年（一三八〇）に成立した古事記日本書紀に依つて、古い建國當時の眞の相が分るだ

らうか。

日本書紀に「一書曰」として他の書からの引用が附記されてゐるから書紀編纂當時史書があつたことは事實であらう、又、聖德太子や馬子の撰んだ天皇記國記は假令今傳はつてゐたとしても、その編纂は推古の二十八年（一二八〇）であるから古事記に先つこと僅に九十年前のものに過ぎない。

記紀を通じてどれだけ正しく神代以來の我國古代の眞の姿が眺められるか、又口から耳へと語り繼がれた記紀にどれだけ原形が保存されてゐるか、語り繼いだ人の個性によつて、事實が歪められなかつたらうか。又社會の相が反映して傳說の原形が變らなかつたらうか。又特に記紀編纂當時、その編纂の目的や當時の社會的事情に依つて內容的に取捨增減が加へられなかつたらうか。

氏の之に對する態度はかうである。

私の想像する所が誤りがないとすれば、日本の社會は、記紀編纂の頃に近づくに從つて、其の變化變遷の幅も速さも增加して居り、記紀の硝子に色が付いて居るとすれば、編纂直前二、三百年間位の色が付いて居ると思ふから、大體この二、三百年間位の社會の眞相を眺め、記紀を讀み行くとき、常にその頭で硝子の色を拂拭し乍ら進めば、古代の原形眞相とまではゆかずとも、之に近い形、姿が眺め得られはすまいかと思ふ。

兎に角、氏は本書に章を分つこと九、創世、產靈神、三層の世界、靈及び神、蘆原中國に於ける兩系の抗爭及び其の融合、天孫出雲兩系融合後に於ける社會相、外來文化、文化融合の過程、奈良時代、とせられてゐるが、これで果して例の二、三百年の社會の眞相が描出し得られたか、どうか、又これに依つて古代の原形眞相に近い形、姿が眺め得られるかどうかは姑く別問題としても、古代人の靈の發展が大體組織的に跡付けられてゐると思ふ。新史觀に立つ一つの勞作として十分一讀の價値がある。（菊判五二三頁、三圓五十錢）（淺子勝二郎）

寄贈交換圖書雜誌目錄

備後史談　十ノ二、三	備後鄉土史會
防長史學　特、五ノ一	防長史談會
國維　九ノ三、四、五、六	國維會
金雞學院叢書　七六、七七、七八	金雞學院
龍谷史談　十三	龍谷大學史學會
伊豫史談　七七	伊豫史談會
埼玉史談　五ノ四、五	埼玉鄉土會
名古屋史談會誌　三ノ二	名古屋史談會
伊勢專一郎　支那山水畫史	東方文化學院京都研究所
禪學研究　二十一	臨濟宗大學禪學研究會
國史論文要目　高師部會編	大塚史學會
西洋中世史史料及考證　四	東京商科大學
間崎万里譯　ヴォルフ民族文化史	刀江書院
筑紫史談　六十一	筑紫史談會
鈴木隆一編　國語索引	東京文化學院京都研究所